

盆地内の集落からみた重畳感のある景観
—韓国農村集落における風水景観に関する研究 その 7—

正会員 ○山口 泰佑^{※1} 同 佐藤 誠治^{※2} 同 小林 祐司^{※3}
同 姫野 由香^{※4} 同 野口 浩平^{※1} 準会員 樋口 夏希^{※5}

7. 都市計画 — 6. 景観と都市設計 c. 景観イメージ・景観評価
韓国 風水 景観 集落

1. はじめに

筆者らのこれまでの研究^{1)~3)}においては、集落の四神方向^{注1)}から集落を含む全方向に対して風水理論に基づいた要素が映り込むことによって風水集落特有の景観を生み出すことを論じてきた。しかし、盆地という特異な地形条件におかれた風水集落では、集落の玄武側^{注2)}からその盆地全体を眺めた時にある独特の景観を生み出すことが確認された。

ここではその 5、その 6 で得られた結果より、風水的特徴を持つ盆地内にある集落がいかにして盆地風水集落独特の景観を生み出すかを論じたのち、現地調査で得られた実際の写真から、その景観がどういったものである

かを示し、さらにヒアリング調査の結果から実際にその景観が見える集落と見えない集落で集落の風水認知や風水理論による吉地の条件に適合するかに差が出るかを分析することで、風水理論上より吉地である集落ほど景観にその独自性が顕著に表れることについての裏付けを得ることを目的としている。

2. 盆地特有の地形条件

李重煥の著書「挾里志」⁴⁾では“水口は地形がよく閉じられていること（閉鎖であること）、その内側に平野が広がるところが吉である。また、閉鎖は何重にも重なっているほど大吉の地勢である”と記されている。

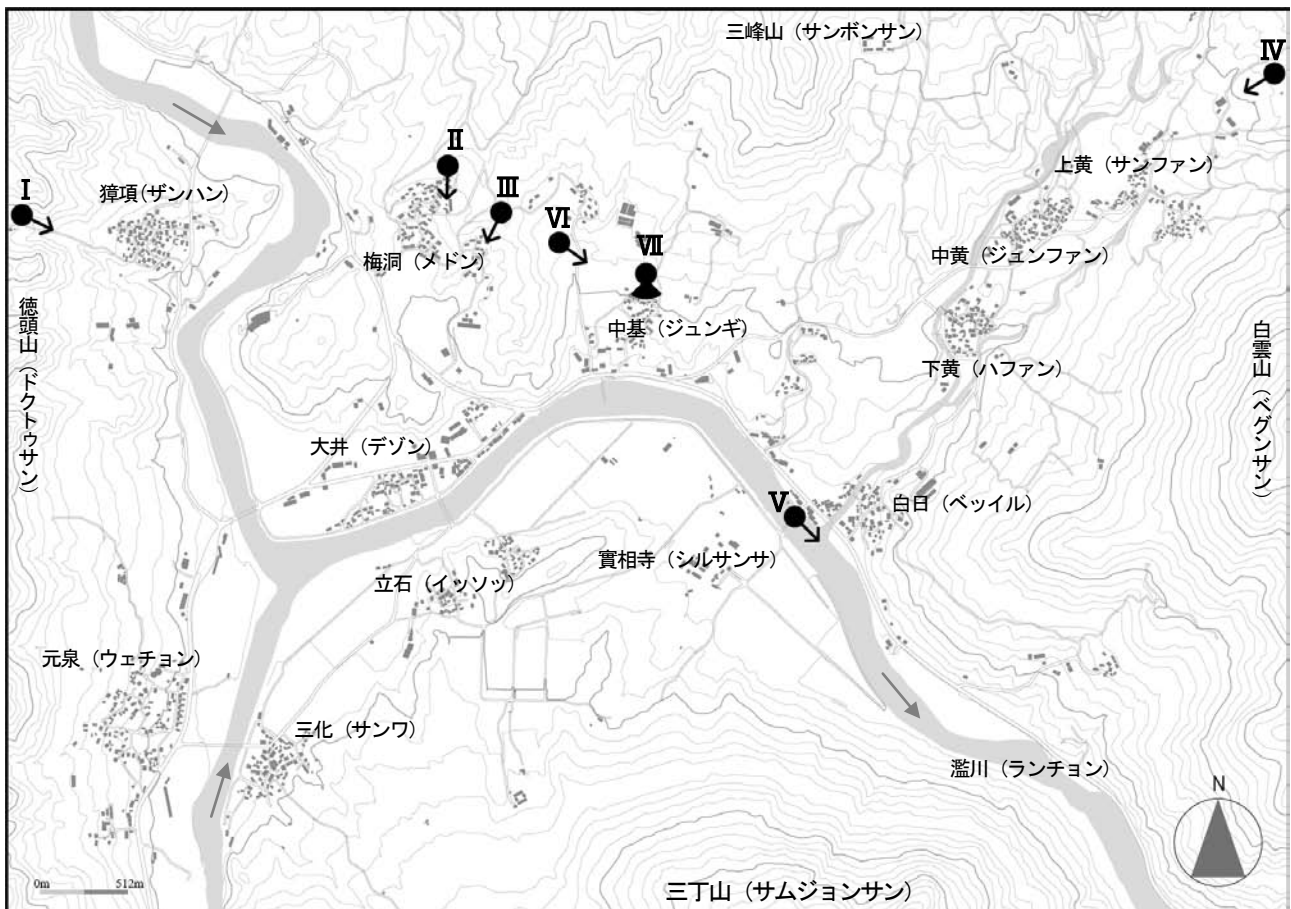


図1 撮影ポイント

その5において風水の形式理論である看龍法と蔵風法によって「白頭山」を祖山とする山脈の連なりから派生し小白山脈—智異山—盆地の四方を囲む大山—各集落の鎮山（主山）と幾重にも重なる山々に囲まれるという立地条件が生み出されることが明らかにされた。また、盆地内の集落が得水法によって選定されることも明らかにされたが、それはすなわち盆地の内と外を結ぶ水口^{注3)}の確保が風水の形式理論によって重要視されていることが伺える。この水口の確保によって盆地の景観に数か所の抜け穴（谷）ができ、より重畳感を感じることできる視対象となりうる点が発生するのである。

以上のような風水の形式理論によってもたらされた立地条件によって、そのフラクタルの末端である盆地内集落の玄武方向から盆地全体、特に水口である谷を眺めると重畳感ある景観を確認できるようになる。

ここで、本研究中に用いる「重畳感ある景観」とは視点場から視対象の可視範囲内ではほぼ無限に山々が幾重にも折り重なり、奥行きのある立体的な景観であることと定義した。

3. 景観写真からみる重畳感ある景観

以上の考察を踏まえたうえで、韓国山内面南部の対象盆地現地調査において撮影した11集落の総計2227枚の写真の中から、本論文で定義する重畳感のある景観が映り込んだ写真を選抜した。尚、撮影の方法は以前までの方法^{1)~3)}と同様に35mmフィルム換算の35mmレンズ焦点距で離集落の四神方向から撮影しているが、今回はとくに玄武方向からの写真を使用している。さらに選抜した写真の中からほとんど同一方向の写真はより重畳感の確認できるものに厳選し、7枚の写真まで絞り込んだ。図1にその撮影ポイントについて示している。写真を絞り込むことで11集落のうち特に4つの集落で重畳感のある景観を他の集落より顕著に確認することができた。

図2は撮影ポイントIのザンハンマウルの集落後方から撮影した写真である。集落の周辺は勾配がきつく、豊かな森に囲まれている。撮影ポイントの付近では主にゼンマイなどの山菜を栽培しており、写真にも近景では集落は見えずに緑に囲まれている。

少し遠くに目を向けると集落の前方にあったホテルが確認できる。そしてその奥では、左右から山裾が交互に折り重なり、幾重にも重なっている様子を確認すること

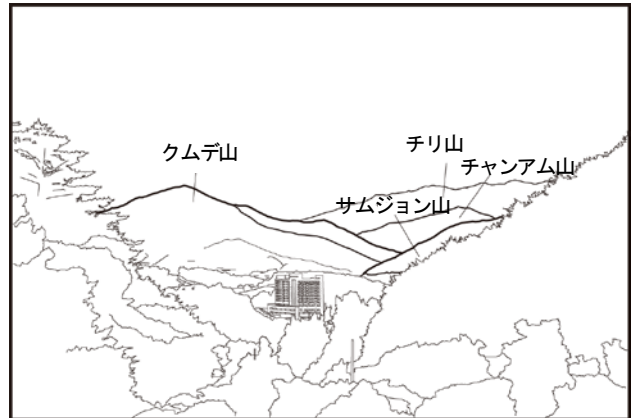


図2 獐項（ザンハン）I

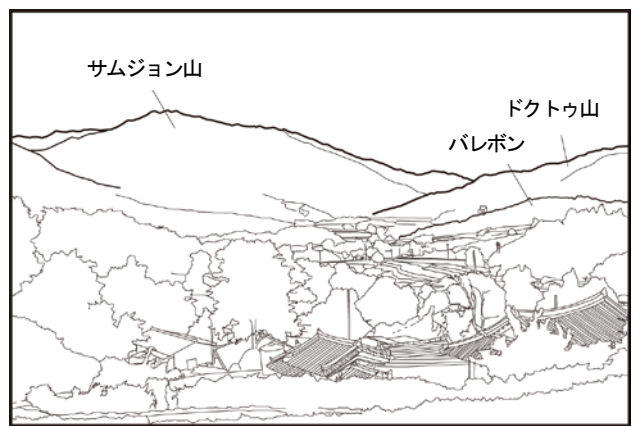


図3 梅洞（メドン）II

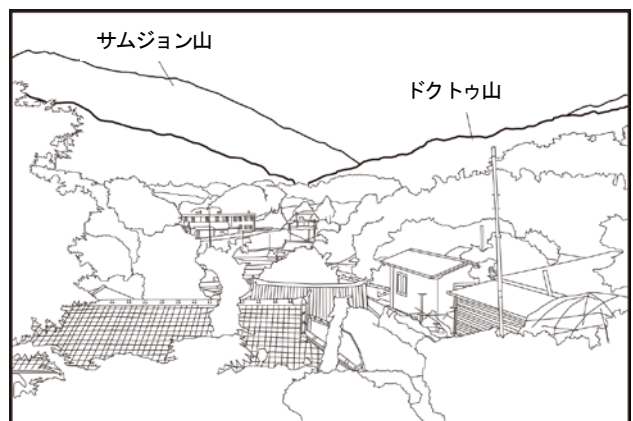


図4 梅洞（メドン）III

ができる。

図3は撮影ポイントIIのメドンマウル玄武側から撮影した写真である。この写真では手前に集落がしっかりと映り込んでおり、その下に広がる盆地の平野部分から連続して、谷に向かって山々が連なる様子がしっかりと映り込んでいる。

図4は撮影ポイントIIIのメドンマウルからの写真の2枚目である。この集落では一つの集落から同じ谷の方向を見ても視点場から視対象への角度を変えることによって景観に類似性があることを示している。重畳感のある

景観が筆者の定義するような共通性を持った景観であることを比較確認できる。

図5は撮影ポイントIVのサンファンマウル後方からの写真である。手前には豊かな田園風景が広がり、その奥に対象の集落が見え、さらに谷まで見渡すと、存在感のある山々が幾重にも折り重なって重畳感のある景観を演出している。

図6は撮影ポイントVのシルサンサに向かう橋の途中からの写真である。盆地の平野部分にあるこの寺はこの盆地の中心で最も気が集まる場所とされており、水口をたどって目を向けると、左右から伸びた山裾の間にさらに山が連なり、最も奥には周辺の山岳信仰の最高位である霊峰智異山が望める。

図7は撮影ポイントVIのジュンギマウル玄武方向からの写真である。これまでの集落と同様に集落の営みは農業と共存しており、そのすべてをやさしく抱きこむようにそびえる後方の山々が確認できる。

最後に図8は撮影ポイントVIIのジュンギマウル後方からのパノラマ写真である。この集落からは盆地全体がほとんど見渡せ、一つの視点場から2方向の谷が一望できる様子をパノラマ写真によって示している。

どちらの谷にも同様に山々の折り重なりを確認することができ、集落と山の位置関係がはっきりと写り込んだ写真であることから、非常によく重畳感のある景観を表した一枚である。

4. ヒアリング結果から見る景観と吉地の関係

以上のように、実際の写真から対象の盆地内では重畳感のある景観が複数のポイントから確認できることを示したが、この景観が同じ盆地内でも見え方に差が生じている。このことから風水の理論上吉地である集落のほうこそそうでない集落よりもより重畳感のある景観を顕著に表すとすれば、風水の理論と景観の関係性を明確に示すことができると考え、ヒアリングの結果をもとに、その

相互関係を明らかにする。表1は現地調査におけるヒアリングの結果である。

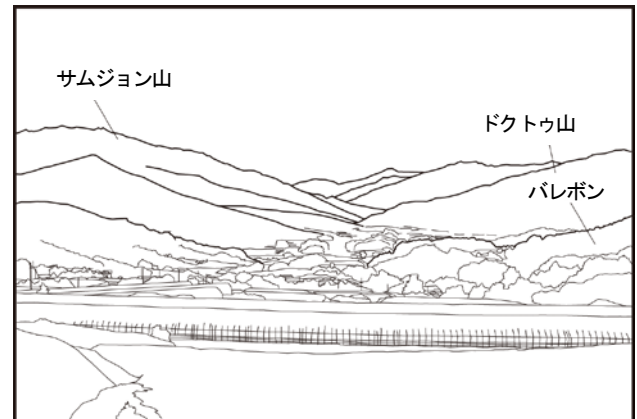


図5 上黄 (サンファン) IV

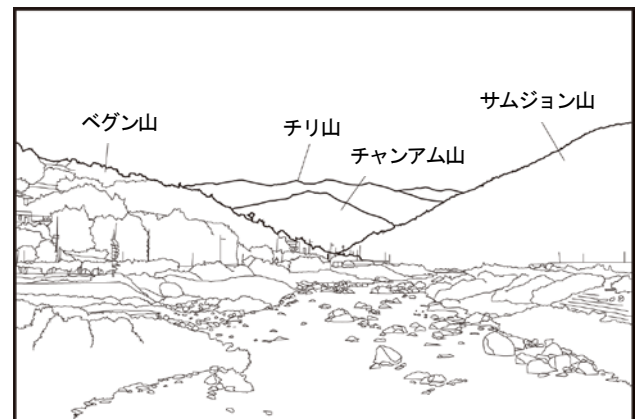


図6 實相寺 (シルサンサ) V

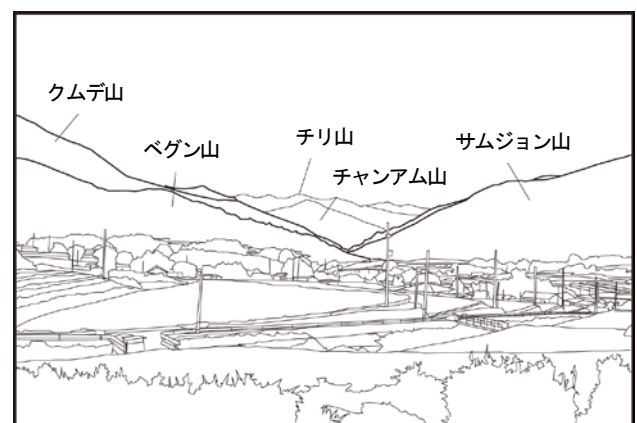


図7 中基 (ジュンギ) VI

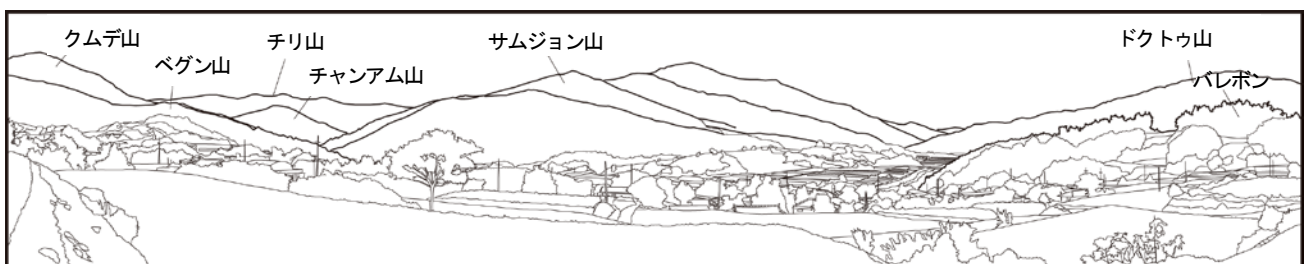


図8 中基 (ジュンギ) VII

表1 ヒアリング結果

集落名	風水認知			風水を感じる理由
	回答数	有	無	
獐項(ザンハン)	5	2	3	
梅洞(メドン)	4	4	0	山が幾度も連なっている。山も川も昔から良いといわれている。
大井(デソソ)	5	3	2	平地で住みやすい
立石(イツソツ)	3	1	2	ソウルのような雨での被害がない。ジルサンサがある・景観が良い(面全体での風水を感じる)。
中基(ジュンギ)	2	0	2	昔、地理学者が訪れ、この土地は風水的に良いと言っていた
元泉(ウエチョン)	1	1	0	昔から風水的に良いと言われている・里の人の心が優しい・チリ山に囲まれている。井戸があり、他の里からも病気になる人が利用しにきたりしている。
三化(サンファ)	6	4	2	山参が山にある・風水的な伝統がある(昔から良いと言われている)。水や山、空気がきれい・外から移住して来る人が多い。
白日(ベッイル)	5	0	5	ジルサンサ・チリ山がある(面全体での風水を感じる)。
下黄(ハファン)	4	1	3	
中黄(ジュンファン)	2	0	2	人の心が優しい(山内面の警察から賞をもらったことがある)・長生きの人が多い。
上黄(サンファン)	2	2	0	山が並んでいる・水や空気がきれい・人の心が優しい。

重畳感のある景観が顕著にみられた集落は、獐項(ザンハン)、梅洞(メドン)、中基(ジュンギ)、上黄(ハファン)の4集落である。表1の風水認知をみると、獐項は5人中2人、梅洞は4人中4人、上黄は2人中2人が風水の認知があると回答している。今回の調査集落では全体的に風水の認知が低かった中で、この3集落は風水の認知が多くみられた。中基では風水認知は2人中2人が無いと回答している。しかしながら風水を感じる理由の項目では、以前地理学者がこの村に訪れた際に、この地は風水的に良いと言ったという回答が得られている。

重畳感ある景観を確認できるかできないかの条件のみでランダムに選んだ集落が風水の理論上他の集落と比較した場合により吉地であるか、または風水の認知が高いことが確認できた。これはすなわち、逆説的に「風水の理論上吉地である集落であるほど、より風水理論によって独自に生み出される景観を顕著に表す」ことの証明になる。

5. 総括

本研究では、その5その6において韓国山内面における盆地の集落にみられる集落周辺の地形構造が風水にどのような影響を受けて成り立っており、実際にどういった地形を構成しているか、またそこにある集落の立地特性がいかなるものかについての分析を行い、その7においてそれらの結果をもとに風水理論によって選定された盆地の立地条件のもとで見られる重畳感のある景観についての考察を進めた。

ここで筆者の定義する風水景観である「重畳感のある景観」の風水理論との関係を実際にその景観を見ること

謝辞

今回の韓国農村集落現地調査に際しましても韓国南原市山内面吏員の金容根さんを筆頭に住民の皆様のご親切とご協力を頂き、大変お世話になりました。また、釜山大学の李仁熙教授、金興萬研究員さんには現地での調査のサポート、通訳等の支援を賜りました。ここに記して、厚くお礼申しあげます。

【参考文献】

- 山口泰佑・佐藤誠治・小林祐司・姫野由香・野口浩平：「韓国農村集落における風水景観に関する研究 その2 一風景写真による景観分析一」、日本建築学会九州支部研究報告, No.50, 305-308, 2011.3
- 野口浩平・佐藤誠治・姫野由香・山口泰佑：「開放型風水景観の特徴把握 一韓国農村集落における風水景観に関する研究 その3一」、2011.9
- 山口泰佑・佐藤誠治・姫野由香・野口浩平：「閉鎖型風水景観の特徴把握 一韓国農村集落における風水景観に関する研究 その4一」、2011.9
- 崔昌祚：「韓国の風水思想」、人文書院、1997年

【補注】

- 注1) 四神観念とは、伝説的な獣である青龍・白虎・朱雀・玄武が東西南北あるいは前後左右の方向を守護してくれるという発想からきたものである。風水における四神の位置は「左青龍・右白虎・前朱雀・後玄武」とされ、穴が南向した場合、東が青龍、西が白虎、南が朱雀、北が玄武となる。
- 注2) 四神座における「玄武」は、集落の「主山」がある方向とするのが一般的である。ここでいう玄武側は主山側、つまり集落の背後を示している。
- 注3) 穴、四神、あるいは内明堂の両側を流れる水流のみなもとを得という。また、得から水が流れ、青龍と白虎が合わさり明堂の外側へと流れ出るところを水口という

*1 大分大学大学院工学研究科博士前期課程

*2 大分大学工学部福祉環境工学科・教授 工学博士

*3 大分大学工学部福祉環境工学科・准教授 博士(工学)

*4 大分大学工学部福祉環境工学科・助教 博士(工学)

*5 大分大学工学部福祉環境工学科 学部生

*1 Graduate Student, Oita Univ.

*2 Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng. Oita Univ., DrEng

*3 Associate Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng. Oita Univ., DrEng

*4 Research Associate, Dept. of Architecture, Faculty of Eng. Oita Univ., DrEng

*5 Undergraduate Student, Oita Univ.